

## 同級生を恨む

昔の義務教育は八年間、尋常小学校六年と、尋常高等小学校二年である。私の時代は成績を公表した、生徒数の一割から、一・五割を優等生と言つて各学年の終業式、卒業式前に全員の前で先生から発表された。

一番（誰々）、二番（．．．）、三番（．．．）．．．と。卒業式には一番の生徒が卒業証書総代、二番が優等生総代、三番が一年間無欠席表彰総代、四番が六年間無欠席表彰総代等、全生徒の前で校長先生から免状を受け取る。

高等科卒業式には八年間無欠席表彰がある。私も八年間無欠席だった。高等科を卒業して成績のよい子は進学する、級で五・六人だけが大河原や白石の高校に進む。小学校卒業から仙台の女子学院に進んだ人もいる。

進学した人達は高校卒業して小学校の代用教員になり、後正教員になった人が、三・四人、校長先生になった人もいる。

私は家庭の事情で進学させられなかった。生家は農家で農仕事や農閑期には珪藻土会社の土方仕事だった、通学している同窓生を見かけると悔しい思いがしてならなかった。だが誰をも恨んではいなかった、親には親なりに考えがあったのである。

だが私は心が狭いのだろう、進学しない一人の同窓生を永年恨み、憎んでいた。進学した近所の友人の悪口を私が言っている

と、進学した友人に告げ口したようだ。羨ましいと思つても悪口は言つた憶えがない。その事をおしえてくれた人がいて、その後友人との交際がギクシャクするようになり、高等科二年間だけの同窓生を恨むようになった。

長い人生の一齣に私は驚く事になる。憎しみ続けていた同窓生は妻方の親戚になつていた。約二〇年前、その同窓生が顔面ガンで入院したので妻と二人で見舞いに行つた。

何年か前手術して昔の面影は全く無くなつてゐるそうだ。再発して故郷近くの白石市刈田病院に入院療養してゐた。二人で病室に入り面会したが、同窓生の顔を注視できない、余りにも変わりが果てて居た。

小学校高等科時代より会つたことがない。昔話して歸つたが私の心から、あの長い憎しみが、スウツト消えていくのが感じられた。同情心が、哀れみか、心の重荷が無くなつてしまつた。

私の人生にはその事以上に諸悪の根源がいつぱいあるが、それ程に思い続けたことがない。同窓生には心から済まない事をしたと後悔の念でイッパイである。

近くの友人との嫌な関係はとうの昔に消え去り、毎年の同級会には親密に一室で思い出話に花を咲かせている。